

わたしをみつめ 高め合う 美術教育

— 深い学びを意識して —

はじめに

「自分に自信が持てず、将来や人間関係に不安を感じている。」
よって、「他者，社会，自然・環境とのかかわりの中で
これらと共に生きる自分への自信を持たせることが重要。」

これは、平成20年中央教育審議会において、日本の子どもたちの実態として浮かび上がってきた課題の一つである。ここで重要なことは、生徒一人一人が「自分の存在は認められている」ということを客観的に自覚し、自己の存在価値（自己肯定感や自尊感情）に気づくことである。このことは、人生を歩む過程で自分のやるべきことを見つけようとしたり取り組もうとしたりすることにつながり、「生きる力」の礎になると考える。

美術科ではこうした生徒の実態を踏まえ、本教科の学びの特性を生かしながら取り組んできた経緯があるが、未だ十分とは言えない。これからの時代に求められる学力観が議論される中で、美術科が今後どのような役割を担えるのかについてしっかりと共通理解を図り、日々の授業改善に取り組む必要がある。

そこで、我々は本研究に先立ち、あらためて美術科の学びの本質について確認し合った。

- ・ 現行学習指導要領の理念である「生きる力（＝確かな学び・豊かな心・健やかな体）」は、各教科領域がそれぞれの学習内容や学び方も含めて育成していくものである。
- ・ 美術科は、「かく・つくる・みる・感じ取る」などの視覚や触覚による表現や鑑賞による造形体験活動、鑑賞活動を通して感性を働かせながら、「基礎的・基本的な知識・技能，思考力・判断力・表現力等，主体的に学ぶ態度」を育成する中で豊かな情操を養うことも重視している。
- ・ 中学校では美術科と音楽科のみに「情操」の育成が教科目標に示されており、この教科が担うべき特質，重大さが表れている。したがって美術科で身に付けた資質や能力を生かし、将来にわたって心豊かな生活を実現する生徒の育成を目指す必要がある。

そして、以上の内容を共通理解した上で、今大会で目指すものとして、研究テーマの骨子を次のようにまとめた。

造形的な視点を理解し、造形の効果や特性を工夫して、	←基礎的な知識・技能
造形的な見方や考え方を働かせて、他者と共有しながら表現を追求したり、自分なりの見方や感じ方を深めたりする資質や能力などを育てていく。	←思考力・判断力・表現力
そして、自己の学びの過程及び成果を自覚し、自他の「よさ」や「価値感の違い」に気づき、自発的によりよい自己の在り方や生かし方を考え続ける生徒の育成を目指していく。	←学びに向かう力・人間性

1 中学校部会テーマについて

中学校部会では、部会テーマについてこれまでの美術科の成果と課題を踏まえながら協議し、

わたしをみつめ 高め合う 美術教育 – 深い学びを意識して–

と設定した。

(1) 「わたしをみつめ 高め合う 美術教育」について

① 「わたしをみつめ」とは、

まず「あるがままの自分を受け入れる＝自己受容する」ことである。これが「自己実現」に向かう原動力となる「自己決定」への勇気をもつことを可能にする。また、学びの過程での自分の変化や成長をしっかりと捉え、自分の新たな課題を見出そうとする姿勢でもある。

② 「高め合う」とは、

協働的な学びによる学び合い、相互理解を通して、受容だけでなく批評し合うことなどによって、より深い「自己実現」に向かう姿である。なお、「自己実現」とは、こうありたい世界、こうありたい自分を実現することである。

③ 「美術教育」とは、

本研究において、「自己実現」に向かうプロセスの中で、「自己決定の繰り返しと積み重ね」を保障する授業づくりと、成果や課題を指導者間で共有することである。

(2) 「深い学びを意識して」について

① 「深い学び」とは、

【自己決定の繰り返しと積み重ねを通して自己実現に向かう学び】であり、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成すること」を指導者が責任をもってめざす授業であると捉えた。

そして「深い学び」＝【自己決定の繰り返しと積み重ねを通して自己実現に向かう学び】を保障するためには、何をどのように支援していくことが必要なのか、その具体的な要素として、以下について共通理解を図ってきた。

【自己決定の繰り返しと積み重ねを通して自己実現に向かう学び】を支える要素

A 「有能感」

・自分で知識や技能を獲得した手ごたえ、自分で「わかった、できた」という実感。

☆留意点：自信をもち「自己決定」できるように、造形的な視点を豊かにし、多様な美術の考え方を学ばせることが重要。

B 「他者受容感」

・認められた、これでいいんだという安心と自信などの「自己受容感」を生み出す要素。

・漠然とした不安を抱きやすい時期にある中学生には特に必要。

☆留意点：日頃から共感的な人間関係、受容的な環境づくりに取り組んでおくことが重要

【自己決定の繰り返しと積み重ねを通して自己実現に向かう学び】を促進する要素

C 自覚（メタ認知）

・学びを通しての達成感だけでなく、自分の変化や成長の理由を確認させていくこと。

・新たな課題を見出し、その解決方法を考えていこうとする意欲や態度を育成していくこと。

② 「意識して」とは、

こうした「深い学び」を支援するため、指導及び評価のあり方について指導者の共通理解を図り、授業改善を意識し続けていくことを示している。本大会では、「深い学び」をめざして取り組んできた成果や課題について協議し、授業改善のあり方について考えたい。さらに次期指導要領改訂において示されている【主体的・対話的で深い学び】について意識していくことでもある。

以上のことを踏まえ、我々は【自己決定の繰り返しと積み重ねによって自己実現に向かう学び】の姿をイメージして授業構想を練ることとし、授業改善の共通視点として以下のことを設定した。

- ・有能感・他者受容感を生み出すための支援・手だてについて、**題材設定**と**指導法**において工夫し改善する。
- ・自覚（メタ認知）の方法について工夫し改善する。

2 研究の過程について

研究方針及び研究計画は岡山支部が作成し、岡山県及び山口県に公開授業及び実践発表を表1のように分担し、各支部等で積み上げてきた取組を生かしつつ、上記の授業改善の共通視点を重視しながら進めてきた。

表1：公開授業及び実践発表の分担

		公開授業	実践発表
岡山	岡山市	2	4
	倉敷市	1	1
	東部	1	
	美作		2
山口	周南市		1

具体的な事例として、岡山支部では平成23年度から全指導者が共通の視点で授業を見つめ直すツールとして、**授業デザインシート**（図1）が提案され、その後、数回のブラッシュアップを重ねて活用してきた。

また、平成27年9月から翌年12月の期間に全指導者による公開授業及び協議会を研究領域ごとのブロックで実施した。これは、一人一人が授業改善の視点を実感し、この研究テーマを全指導者で追究することが、この研究の最も価値ある成果になると考えたからである。

図1：授業デザインシート

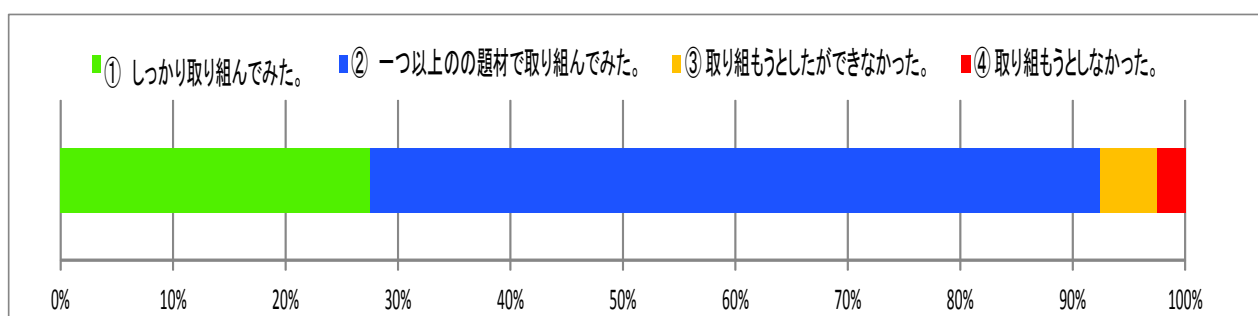
学校		学年	指導者名	
題材	マークの魅力を生かして～身近なマークの鑑賞とマイマークのデザイン～		表現1 (鑑賞) (鑑賞)	
つきたい力(学習目標)				
【関心・意欲・態度】	文字をモチーフにしたマークの鑑賞や表現に関心を持ち、自分なりの感じ方を大切にしながら意欲的に取り組もうとする。			
【発想・構想の能力】	自分の名前やイニシャルなどの文字の形を手がかりにして、アイデアスケッチを重ねながら自分なりのアイデアを構想する。			
【創造的な技能】	スタンプを制作する材料や用具の特性を理解し、マークの面と地のバランスを想像しながら、見通しをもって制作しながら、自分らしい表現を追究する。			
【鑑賞の能力】	マークに込められた造形的な工夫やよさに対する自分なりの見方や感じ方をもち、話し合い活動を通して見方や感じ方を広げる。			
指導者が設定すること(FIX)		生徒が自由に考えること(FREE)		
題材：マークの鑑賞とマークのデザイン 素材：スチレンボード		教材：モチーフ選び		
有能感 他者受容感	A 題材設定 何を使って	有：課題解決型の鑑賞題材を設定 ・日ごろ無意識に扱っているマークを対象 ・トリックアートの要素を含んだマークを対象		
	B 指導方法 どのように	有：これまでの学び(知っていること)の活用 モチーフの選択幅を増やし選ぶ楽しさ必要性を感じさせる。 受：自分の意見が出しやすい・他者の意見を参考にしやすいグループ活動の挿入。		
	M 自覚の方法 (メタ認知)	自：授業後にめあてに対する自己の変化について記述による振り返りと次時のめあてを立てさせる。		
評価標準	Aの具体例	Bの状況	Cへの手立て	
発想や構想の能力	感性を働かせて、複数のデザインを比較し修正など加えながら練っている。	感性や想像力を働かせて文字をモチーフにしたマークのデザインを豊かに着想し、自分ならではの表現の構想を練っている。	線からの表現や基本的な幾何形からのアイデアスケッチを勧める。	
創造的な技能	表現方法や過程を理解し、見通しをもって効果的な表現を追究している。	感性や造形感覚などを働かせて、必要な技能を身に付け、自分の意図に応じて表現方法などを創意工夫し創造的に表している。	やり直しができるよう材料を準備し、安心して取り組むよう促す。	
鑑賞の能力	感性を働かせて、自他のデザインを根拠をあげながら批評している。	感性や想像力を働かせて、対象のよさや美しさなどを自分なりに根拠をあげながら、感じ取り味わったり、マークの目的や条件を帰納したりしている。	何をどう書けばよいか事例を示す。	
次 時	主な学習活動内容	評価の観点 関 発 創 鑑		
1 2	マークの鑑賞	○	○	文字を生かしたマークの工夫やよさを感じ取る。 ワークシートの記述
3 4	アイデアスケッチ	○	○	文字の他の要素や組み合わせ方を工夫してアイデアスケッチしながら、表現を練ることが出来る。 ワークシートの記述

3 成果と課題について

(1) 研究に関するアンケート（岡山支部会員 40 名対象：H 29. 7 月末実施）の結果
このアンケートは、指導者の立場から、今回の研究の成果と課題を捉えようとしたものである。

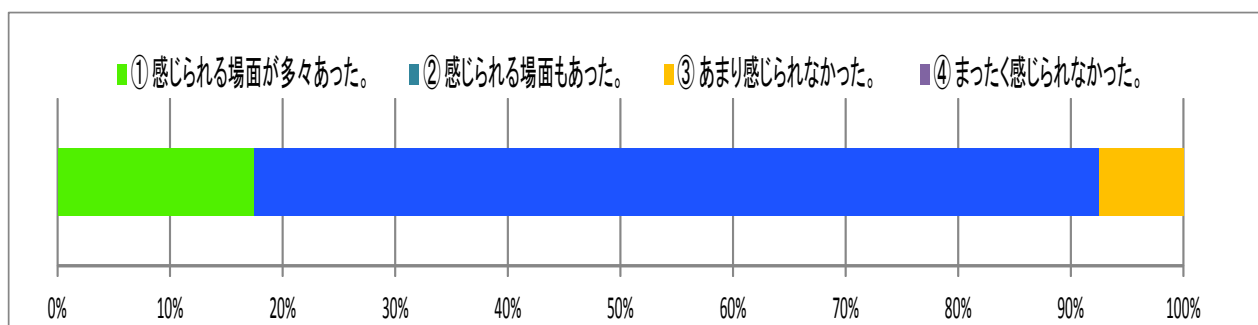
I： 授業改善の共通視点として「有能感」「他者受容感」「自覚（メタ認知）」を掲げたわけですが、本研究期間中に、ご自身の実践においてこれらの視点による授業改善に取り組まれましたか。

① しっかり取り組んでみた。	② 一つ以上のの題材で取り組んでみた。	③ 取り組もうとしたができなかった。	④ 取り組もうとしなかった。
11 人 27.5 %	26 人 65 %	2 人 5 %	1 人 2.5 %



II： ご自身や他の指導者の実践において、「有能感」「他者受容感」「自覚（メタ認知）」の視点による支援や手だてが、「自己決定を繰り返し積み重ね、自己実現に向かう学び」に有効とまではいかななくても可能性があるなど、成果としての変化を感じられる場面がありましたか。

① 感じられる場面が多々あった。	② 感じられる場面もあった。	③ あまり感じられなかった。	④ まったく感じられなかった。
7 人 17.5 %	30 人 75 %	3 人 7.5 %	0 人 0 %



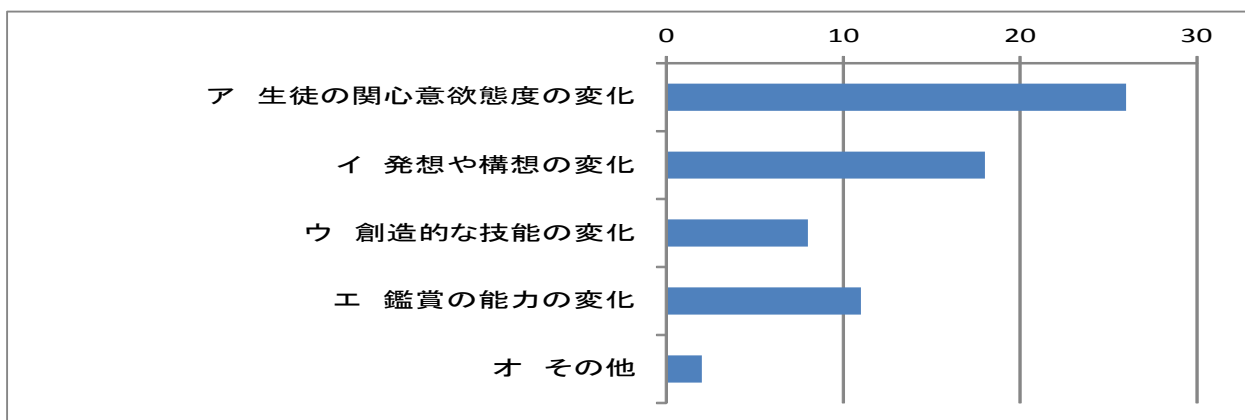
Ⅲ：Ⅱで①②と回答された方（37人対象）にお尋ねします。

その成果としての変化は、どのような場面で感じられましたか。（複数回答可）

A 生徒の姿から

回答のべ人数

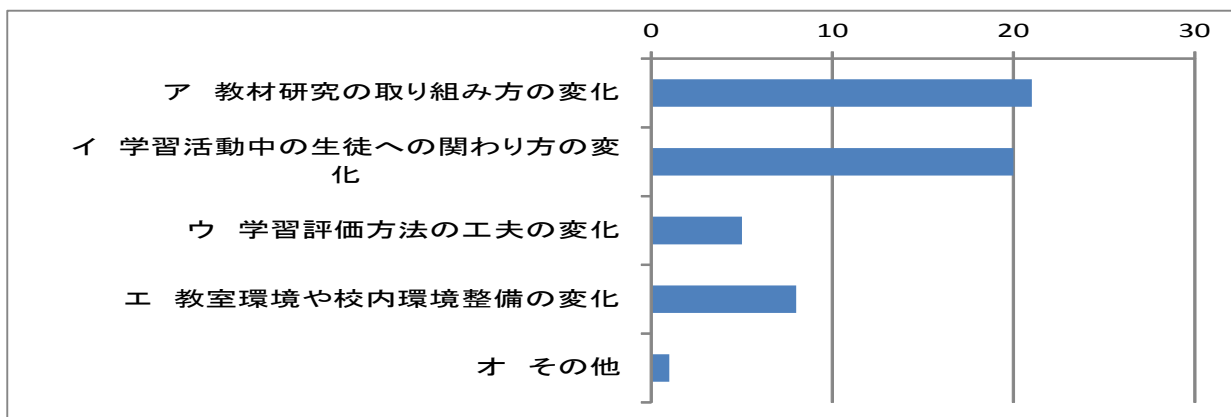
ア 生徒の関心意欲態度の変化	26
イ 発想や構想の変化	18
ウ 創造的な技能の変化	8
エ 鑑賞の能力の変化	11
オ その他	2
<ul style="list-style-type: none"> ・全体的に前向きで素直に取り組み「失敗を恐れずやってみる」生徒が増えたように感じる。 ・全体的に他者を受け入れようとするところが多く見られた。 ・「ねらい」の理解が上手くいく。 ・学習の「仲間」づくりにつながる。 ・何となく生徒が自信を持って授業に取り組んでくれる気がする。 	



B ご自身の姿から

回答のべ人数

ア 教材研究の取り組み方の変化	21
イ 学習活動中の生徒への関わり方の変化	20
ウ 学習評価方法の工夫の変化	5
エ 教室環境や校内環境整備の変化	8
オ その他	1
<ul style="list-style-type: none"> ・意外に特別な用意がいらぬ気がする。 	

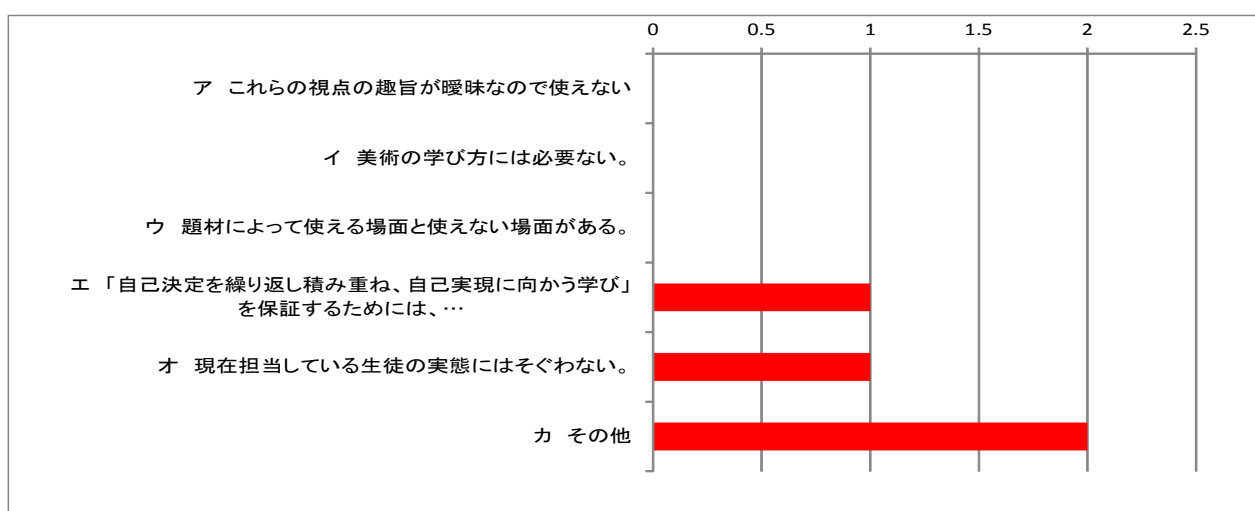


Ⅳ：Ⅰ及びⅡで③④と回答された方（4人対象）にお尋ねします。

「有能感」「他者受容感」「自覚（メタ認知）」の視点について、どのような課題あると思われますか。（複数回答可）

回答のべ人数

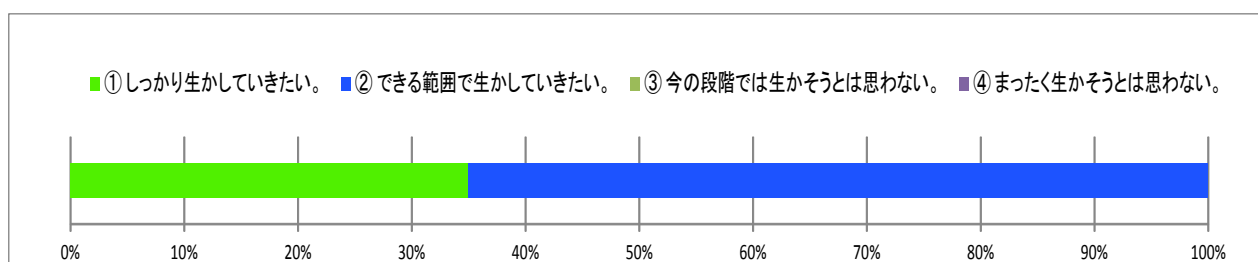
ア これらの視点の趣旨が曖昧なので使えない。	
イ 美術の学び方には必要ない。	
ウ 題材によって使える場面と使えない場面がある。	
エ 「自己決定を繰り返し積み重ね、自己実現に向かう学び」を保証するためには、「有能感」「他者受容感」「自覚（メタ認知）」だけでは不可能。	1
オ 現在担当している生徒の実態にはそぐわない。	1
カ その他	2
<ul style="list-style-type: none"> ・「自己決定を繰り返し積み重ねる」ための授業時間が足りない。 ・環境的に難しい。 	



Ⅴ：「有能感」「他者受容感」「自覚（メタ認知）」の視点を、今後の授業改善に生かしていきたいと思われませんか。

① しっかり生かしていきたい。	② できる範囲で生かしていきたい。	③ 今の段階では生かそうとは思わない。	④ まったく生かそうとは思わない。
14人 35%	26人 65%	0人	0人

- ・今回の取り組み以前から試みていたことを再確認できる機会であった。
- ・現在担当している生徒の実態から、様々なアプローチが可能なのでやっていきたい。



(2) 考察

① 成果について

質問Ⅱの肯定的回答の理由について質問Ⅲで、今回の成果を、**A:生徒の姿**、**B:指導者自身の姿**から捉えようとした。

まず、**A:生徒の姿**に視点をあてた回答であるが、研究対象にした領域に取り組んだ指導者数に差異があるので、ここでの順序にはあまり意味はないと捉えた。さらに、変化の基準は何かを示すことができていないので、ここでの回答は指導者の主観として捉えるほかはないが、自由記述の内容はその根拠を示しているものとして注目したい。

- ・ 全体的に前向きで素直に取り組み「失敗を恐れずやってみる」生徒が増えたように感じる。
- ・ 全体的に他者を受け入れようとするところが多く見られた。
- ・ 「ねらい」の理解が上手いく。
- ・ 学習の「仲間」づくりにつながる。
- ・ 何となく生徒が自信を持って授業に取り組んでくれる気がする。

一方、**B:指導者自身の姿**に視点を当てた回答は、「実感」を示すものとして注目したい。

ア 教材研究の取り組み方の変化 (回答延べ数：21 / 37人 56.7%)

イ 学習活動中の生徒への関わり方の変化 (回答延べ数：20 / 37人 54.1%)

本研究の成果としてこの2項目がこの研究の成果を象徴するものと考えていた。生徒の成長を研究テーマでは掲げているが、実は、今回の研究テーマ「わたしをみつめ 高め合う」は指導者にもあてはまると考えるからである。我々指導者は授業力として何を身に付けるのか。その重要なものとして、「目の前の生徒の実態にあった題材を設定する力」だと考えたい。そして、「つまづく生徒の反応を予想し、事前にその支援策を講じる力」であると考えたい。今回の研究の視点である「有能感」「他者受容感」「自覚(メタ認知)」は、まさに「支援策を講じる視点」として共有しようと掲げたものであり、以上のことから上記の2項目**ア・イ**は研究の成果を示すものとして捉えたい。

② 課題について

質問Ⅰと質問Ⅱの否定的意見の理由について、質問Ⅳで今回の問題点や今後の課題を捉えようとした。指導者の取組への関心意欲ということだけでなく、今回の研究の方法が必ずしもすべての生徒に適しているものでないことを確認しなければならない。

今回の研究で、何がどのように効果があったのかまで全体として整理できなかったのは研究計画の甘さが原因である。各研究グループにおいて総括していただくことを望みたい。

なお、今後の研究課題として、次期学習指導要領において基礎的な知識として明確にかつ具体的に示された「共通事項」を軸にした授業改善による実践研究が求められる。理由は言うまでもなく、美術科で育成する知識・技能、思考力・判断力・表現力を裏打ちするものであるからである。

(3) まとめ

今大会で中学校部会が掲げたテーマについて、「美術科教育としてどうなのか？これは生徒指導の研究テーマなのでは？」というご指摘をいただいた経緯がある。

3年前、研究主題の検討会で出てきたキーワードは「自己有用感」であった。「自分の資質や能力を世の中で生かしながら共に生きることに価値を見出している心情や態度」を思い描いた。ところがこれはあまりにも抽象的で、美術の学びの成果としては問えないだろうということになった。

やはり、この教科の特性は造形要素を介して思考判断する過程にある。では、学ぶ側、指導する側、双方にどのような課題があり、その課題に対する手だてとして何が共有できるのか、そこにしっかりと焦点を当てて取り組む必要性が出てきた。

そこで、出てきたのは、「内発的動機」であった。これまでも、この類のテーマとして「主体的に」「いきいき」といったキーワードの元で様々な取組がなされてきた。「子どもを中心にした学習」をどう生み出すのか、「作品主義からの脱却」を目指して、これまで多くの指導者によって題材開発や指導法の提案がなされてきた。

形や色、材料によって生まれる作品が主役なのではなく、その過程から「どう感じ取り、何を習得し、活用できる資質や能力として何が育まれたのか」という子どもたちの変容や成長を責任を持って支えていくことへの意識改革が進められてきた。

さらに今後、美術科も含め学校教育において重視しなければならないのは、この紀要の冒頭でもふれた「子どもたちの課題」解決に向けて、この教科ならではの学び方をより明確にしつつ、授業改善に生かしていくことが求められていることである。

こうした中で、我々は本研究で何を提案すればよいのか。それは共有できうるものなのか。美術科の指導の技量を高め合っていけるものなのか、研究の主題や方法が定まるまでに何度も修正訂正を繰り返した。一番、苦慮したのは、次期学習指導要領改訂との関連性をどこまで図るかということであった。ある程度の動向は芸術ワーキンググループでの論点整理などから情報は得ていたものの、確かな情報が定まっていない段階でもあったため困難を感じていた。結局、次期学習指導要領の改訂の骨子を研究内容と十分位置付けるまでには至らなかった。

ところが、今年2月末に出た改訂案を見て、我々が授業改善の視点として掲げてきた「**有能感、他者受容感、自覚**」といった視点が、【主体的・対話的で深い学び】の重要な要素になりうることを実感した。

わずか2年という期間ではあるが、試行錯誤しながら取り組んできた【**自己決定の繰り返しと積み重ねを通して自己実現に向かう学び**】を保証するための視点は、【主体的・対話的で深い学び】の視点そのものではないかと感じている。

しかしながら、こうした研究成果は至極当然のことで、これまでも美術科で大切にしてきた学び方の特質であることを確かめたことに他ならない。ただ、未だに、「描き方、つくり方」指導になりやすい傾向や「美術科で身に付ける資質や能力」の育成をねらいとした学習目標の設定のあいまいさが見受けられる現状がある中で、指導者間でこうした支援のための手だての視点を改めて整理し、確認し合えたことにこの研究に取り組んだ意味があったと捉えたい。